

【意思決定支援あるいは共同決定とは何か？－その1/2】

人は、「相談される」という状況に身を置かなければ、「答えようとする」、すなわち「自己決定しよう」とは思うようにならない生物です。「何か食べたい？」と聞かれるから、思いを巡らし「ラーメン」と答えるようになるわけです。そろそろお昼の時間だからと、「ラーメン」がオートマチックに出て来てしまう状況では、「答えようとする」気持ち（力）は育ちません。とすると、「相談する」という行為が、意思決定支援のスタートであるということが、まず確認できます。

次に、なぜ人が「相談する」という行為を発動させるかということについて考えてみましょう。それは、相談者が、相談の対象者には、相談すれば、必ず答えを返す能力があるだろうと暗黙裡に了解しているからです。つまり、答えが返りそうもないときには、私たちは相談しないのです。

ここで、世間の常識が邪魔をします（私たち、知的障がい者の支援を専門にしている者は、こんな常識に取り込まれてはいけませんが大丈夫ですか？）。重い知的障がいの方を目の前にして、いったいどのくらいの方が、この方々には、相談されれば答えを返すことができる能力を持ち合わせていると考えてくれているでしょうか？わかりますよね。「うちの子は、何を聞いても分かりませんから…」「食べるくらいしか楽しみがないですから…」「言うことをきかないようだったら何回も言って聞かせて下さい…」そんな言葉の裏には、知的障がいのある方は、相談に値しないという無意識の思い込みがあるのです。これが現代日本の世間の常識です。

とすると、どんなに重い知的な障がいがあっても、この方々は、相談されれば、答えを返す力があるんだと、世間の常識に反して信じることができると、意思決定支援ということになります。

ほら、やっぱり意思決定支援は、難しいでしょ。だから専門的な仕事なのです。

私たちの仕事は。世間の常識を翻すことにチャレンジすることです。

どんなに知的障がいの重い方であっても、相談し続ければ必ず答えをくれるようになります。しかし、その相談方法には、絶対に必要な条件があります。それは、答え（意思表出行動）を否定しないことです。「オシッコに行こうか？」と誘って「動かない」時、その行動は相談をしたことの結果として、返してくれた答え（意思表出行動）ですから、否定してはいけません。これを否定することは、せっかく出たかたつむりの角を強く突くようなものです。こんなことが、日常的に繰り返されれば、かたつむりはもう角を出さなくなってしまうことでしょう。「動かない」時、「そうか…行くのイヤなんだ…じゃ、またあとで誘いに来るね」、これが相談の帰結としてのやりとりです。自己決定は、決して一人でなされるものではありません。いつでもそれはコラボレーション（共同作業）です。「動かない」という意思と、それを受け止める支援者の「行くのイヤなんだ」という反射板があって、「動かない」という意思が、自己決定として成立して来るのです。

ここに自己決定支援の3つ目の要素が確認できます。言葉にならない意思表出行動を言語化すること、そして、そうし続ける日常が単なる意思表出の段階にあった行動を意思形成・自己決定へ向かわせるのだと。

<まとめ>

自己決定支援の要素とは？

その1で述べられていること

- ①なんでも相談するという姿勢－意思表出支援
- ②相談すれば必ず答えを返す力があると信じる姿勢
- ③意思表出行動を否定せずに言語化すること－意思形成支援

次回その2で述べられること

- ④意思表出行動の言語化する能力（チューニング能力）